

〔書評〕

アウグスティヌス著

『アウグスティヌス著作集』全一五巻別巻一冊

一九七九年より刊行中 教文館

岩 本 助 成

『アウグスティヌス著作集』全15巻が教文館から刊行中で、喜ばしい限りである。この邦訳著作集は、彼の全著作から見れば小規模のものであるが、『神の国』など本邦初訳の主要著作を含み重厚な内容を示している。筆者がこの小文を書き綴っている時点では、なお半数近くが未刊である。既刊分だけの書評では中途半端のそしりを免れ得まい。そこで以下においてその概要を紹介しながら、本著作集刊行の意義を述べてみたいと願う。

アウグスティヌスが古代教会における最大の教父であることは誰もが知っている。彼において、ヘブライズムとヘレニズムはその総合を見たと言われる。「中世と近代を通じて今日にいたるまで、彼が提出しなかった問題はないといっても過言でないほど」である。アウグスティヌスに先立ってその著作集が刊行されているルターやカルヴァンやウェスレーにしても、実は、この偉大な先達を手引きとして聖書を学んだのである。又、こ

の先達の問題点を克服しようと志しつつ彼ら自身の信仰、神学、宣教の業を形成していったと言ってもよいのではあるまいか。遅きに失したとは言え、このように大切な著作集が、美しい達意の文章に訳されて我々のもとへ届けられたのであるから、我々の喜びも大きいのである。これを期に、古代教会の宝庫が開かれんことを！

さて、本著作集の訳出に際して採用された底本は、「デクレ版」である。全85巻中、35巻がすでに出版されているアウグスティヌス全集である。原文とフランス語とが対訳の形をとっている。各巻によって相違はあるが、くわしい解説や索引のついたものもあって、本著作集でも適宜、採用されているようである。

デクレ版のほかに、今なお版を重ねるミューンヌ版やマウリ版もあるが、新しい校訂版に取って代られつつある。しかしその校訂版も既刊分は少なく、*Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum* いわゆるヴィーン版中のアウグスティヌス集は、19巻しか出版されていない。『三位一体論』を含む *Corpus christianorum, series latina* は、既刊16巻を数えている。このような現況をふまえると、デクレ版の底本としての採用は妥当である。アウグスティヌス著作集の各国語訳も盛んである。我々が入手し易い最新の英訳本について付言しておこう。The Fathers of the Church (Consortium Press) という「教父著作

集」が67巻ほど出ているが、そのうちの21冊は「アウグスティヌス集」である。特に、記通から成る書簡集や、断篇から成ると思われる説教集などは、説教者、牧者としての彼の面影をほうふつとさせるものがある。

邦語著作集の翻訳陣はいずれも、アウグスティヌス研究に打ち込んでこられた方々ばかりである。訳者の一人から伺ったところでは、この訳業に費される労力は想像以上である由。その労によって我々は、美しく正確な訳文でアウグスティヌスに聴き入ることができるのである。

第1巻から第3巻までは、『初期哲学論集』であり、成熟したアウグスティヌス神学が、どのような形成過程をふんできたかの一端をのぞかせる。第1巻（清水正昭訳）は、本邦初訳の『アカデミア派駁論』に加えて、『至福の生』、『秩序』、『ソリオキア（独白）』を収めている。388年7月末～8月初めにかけておこったとされている彼の回心経験のあと、友人たちとミラノ近郊カシキアタムで行なった対話を中心としている。全篇に哲学する喜びが溢れている。同時に、当時の哲学的思索で理解できないキリストの奥義を、聖書の学び、特にパウロの手紙を学びつつ悟っていく姿が明らかとなる。

カシキアタム対話の後篇というべき著作を収めたのが第2巻（茂泉昭男訳）である。『魂の不滅』、『魂の偉大』、『教師』（以上、本邦初訳）、『真の宗教』から成る。387年春、受洗した彼は故郷への旅路で母を失う。タガステでの修道生活を経て、ヒッ

ポ・レギウスで司祭の按手を受けるまでの時期を中心としている。前巻の哲学的思索は徐々に神学的思索へと色合いを変えている。魂とは「理性をそなえ、身体の支配に適した特別な実体」（『魂の偉大』13・22）と答える彼は又、真の宗教を問いて、「われわれを唯一の全能な神に結びつけるもの」と把えている。人間に知識を与え得るものは、「内なる教師、イエス・キリストのみ」と答える。

第3巻として予定されているものは『自由意志』（泉治典訳）と『音楽論』（海老沢敏、原正幸、共訳）である。前者はマニ教徒反駁の意図をもって執筆したもので、ローマで着手しヒッポで脱稿している。後者は教師と生徒の問答形式をとって記された神学的美学の一つである。

著作集の第2群は、第4巻から第6巻にいたる神学著作集である。ヒッポ・レギウス教会での司祭按手から司教への道において記された。マニ教批判、ドナトゥス派との論争を経つつ、彼はますます深く聖書の学びに沈潜していく。第4巻（赤木善光訳）には、『信の効用』（マニ教批判をしながら、聖書と教会の権威を論じたもの）、『信仰と信条』（異端を念頭におきつつ信条の解説をしたもの）、『シンプリキアヌスへ』（ローマ7・7～25、9・10～29についての質問に答え、彼の恩恵論を明らかにした手紙）、『エンキリディオン（信仰・希望・愛）』（比較的晩年の作で、信仰を中心に論じている。アウグスティヌスの信仰及び神学への入門書としても著名）が収められている。

第5巻は、その試訳を一部をすでに発表している宮谷宣史訳の『告白録』である。古くは服部英次郎訳（岩波文庫）、新しくは山田晶訳（中央公論社『世界の名著』）で親しまれてきたものに、新しい訳文が加わることとなった。彼は自らを救いたもうた全知全能の、イエス・キリストの父なる神を讃美し、又、自分と同じ迷妄の巷をさまよう友に、恵みの事実を証している。ハインリッヒ・ボルンカムがルターについて語ったことばを借りるなら、アウグスティヌスの信仰と神学は、彼自身の生涯と無数の糸でつながれ不可分離の関係におかれている。『告白録』を、記憶論、時間論、創世記講解と読み進みつつ、この感が一入深くなるのを覚える。

「偉大なるかなあなたは、主よ、この上なく讃えらるべきかな。偉大なるかなあなたの力は、あなたの知恵には限りがない。……あなたが（われわれを）かりたてます。あなたを讃えることが喜びであるように、それは、あなたがわれわれをあなたに向けて造られたからです。そのためわれわれの心はあなたのうちに憩わないかぎり、安らぎをえません。」この冒頭の讃美の祈りは、我々を全巻へと引き込んでいく。

第6巻の『キリスト教の教え』（加藤武訳）は、聖書解釈論と説教論とから成る。「信仰の規則」（*regula fidei*）や文字と霊から説きおこし、最高の解釈原理としての愛へと読者を導いていく。

4巻から成る著作集第3群は、「論争文書」である。彼の全

著作の量から見ても「論争文書」の占める割合は大きい。第7巻は、その合理主義の克服と戦った『マニ教駁論集』、第8巻は、「聖徒のみの教会」に対し、公同教会を信じて戦った『ドナティスト駁論集』（坂口昂吉、金子晴男訳）、第9巻と第10巻は、恵みと自由意志との関係を中心とした『ペラギウス駁論集』（金子晴男、小池三郎訳）となっている。

編者も訳者も第11巻～第15巻より成る『神の国』（赤木善光、野町啓、泉治典、大島春子、岡野昌雄、松田慎二、村上二三訳）に力を注いでいる。「神の国と地上の国との対立は、彼自身の魂の内部に戦った神への愛と自我への執着との葛藤を、人類の歴史に放射したものとも言える。否むしろ彼の心眼には、彼の内部に戦われた戦いは、人類の歴史を通じて遙かに大規模に行われる戦いの「小断片と見えただであらう」（岩下壮一『中世哲学思想史研究』283～284頁）という評言は、的確に本書の性格を言い当てている。永遠の都ローマはゴート族に侵略された。それをしも、キリスト教のせいにする攻撃に対し、彼は弁証の書を書かざるを得なかった。特に11巻～22巻までは、自己愛による地の国と、神への愛による天の国との対立を論じる。その対立が織りなす転変の中で、キリストにおける神の約束の成就と終末におけるその完成とがうたわれている。「あそこで、わたしたちは神を仰ぎ見る。仰ぎ見て愛し、愛して讃美する。これこそ、終りである。終わらなき終りである。」この文章で彼は壮大な終末論的歴史神学書の筆をおいたのである。

『石原謙著作集』全十一卷

一九七八年 岩波書店

湊 晶子

キリスト教の源流と展開を中心に

本書作集の刊行により、岩下壮一、吉満義彦、石原謙、征矢野晃雄、三谷隆正らによってわが国に始められたアウグスティヌス研究も一段と発展するであろう。本学会誌にも研究論文が多く載せられることとなる。更に彼の聖書講解、説教、手紙が邦訳され、真実なるお方へのひたむきな誠実に生きた偉大なキリスト者の全貌が明らかにされるのを待ち望むものは、私一人ではなからう。(最良の入門書は宮谷宣史『アウグスティヌス』(「人類の知的遺産」第15巻、講談社、昭56年)である。『著作集月報』に連載の『アウグスティヌス小伝』(赤木善光著)も興味深い。『中世思想研究』(「中世哲学会編、既刊21冊」)などの諸論文に注目したい。より一般的なものとしては、『共助』(「基督教共助会より月刊」)が京大の山田晶教授の講演などを連載している。)

(日本自由メソヂスト教団東住吉教会牧師、大阪基督教短大教授)

石原謙先生の永年にわたる研鑽によって残された業績は、質量とも豊富であり、そのすべてを紹介することは不可能な程である。一九〇三年二十一才で「ナザレの聖者を論ず」を第一高等学校校友会雑誌に発表されてから、一九七六年九十四才で「死よ、なんじの刺は何処にありや」を『死と終末論』(創文社)に寄稿されるまで七十年以上にわたって持続的にキリスト教史の分野で研究活動をされた先生は、学識面でも、信仰生活の面でも日本の歴史神学の誇りとする方であると思う。先生は一八八二年切支丹禁制の高札が撤去されてから間もなくして、当時では稀にみる牧師の家庭に生れられた。学校でも、地域社会でも反キリスト教的風潮の中に育ち、常に偏見や抵抗の中でキリスト教の研究を続けられたと回想録の中に記しておられる。(第十一巻回想)

宗教、思想、学問の自由は認められているとはいえ、古い問題が形を変えて数多く存在し、新しいより困難な問題を提供し

ている今日の情勢の中で、日本のキリスト教史と共に歩みつつ、ヨーロッパ・キリスト教史を多岐にわたって研究され、その上で、日本キリスト教史の再評価をされた先生の研究に触れることは意義深いと思う。久しく絶版となっていた著書も加えられて、一九七九年に石原謙著作集としてまとめられたことは大変感謝なことである。

著作集に収められている内容は、ユダヤ思想から新約聖書、原始、古代、中世キリスト教、宗教改革とその神学、さらに日本キリスト教史など、まことに広範囲にわたるため、全般については目次程度の紹介にとどめ、先生のライフワークとも言うべき「第八巻、キリスト教の源流」と「第九巻、キリスト教の展開」に対象を限定して取り扱わせていただくつもりである。第一巻、初期の著作。先生は「キリスト教とは何か」の課題について、哲学的基礎に関する考察を重ねつついくつかの論文を書いておられる。「キリスト教とギリシヤ哲学の交流」「宗教哲学」など。第二巻、旧・新約聖書。第三巻、初期キリスト教研究。原始キリスト教からアウグスチヌスまで。第四巻、中世キリスト教研究。後述。第五巻、六巻、宗教改革、後述。第七巻、キリスト教史。原始基督教から宗教改革までの通史。第八巻、キリスト教の源流。後述。第九巻、キリスト教の展開。後述。第十巻、日本キリスト教史論。「中国プロテスタント宣教史」「日本基督教団の成立とその発展」「日本キリスト教の歴史的意義と展望」など貴重な論文が収められている。第十一巻、回

想・評伝・小論。「学究生活五十年の回想」、ハルナック、シェーベルト史学の特質など数多くの小論が収められている。

以上十一巻のうち第八巻の「キリスト教の源流」と第九巻の「キリスト教の展開」とは、先生が九十才になられた一九七二年に刊行されたものである。これらは通史というよりも、石原先生がいままでなさって来られた研究の積み重ねを、通史的な体裁でまとめられたものということが出来る。第八巻は、二部に分けられ一部ではキリスト教の起源と題して原始キリスト教から帝国両教会の分離までが取り扱われており、第二部はほとんどアウグスチヌスに当てられている。イエスによって始められたキリスト教は、異教世界において様々な否定を受けつつ発展し、アウグスチヌスにおいて強化発展させられたとする。石原史学においては源流という語は、起源を越えた概念を表わし、単に原始キリスト教だけでなく、四世紀までを包括した内容に用いられている。ローマ的伝統の中にあつて思想的に弱く乏しかったキリスト教を鍛錬して、「宗教的、神学的に強化するためには、アウグスティヌスの出現を待たねばならなかった。」「彼はカトリシズムの完成者であると共にある意味でカトリック教会を超えた人物であり、全キリスト教史を通じて最大の一人である。」(第八巻二三頁)先生はアウグスティヌスという人格と彼の神学を通じて、キリスト教はそれ以後の歴史の展開に対して源流となったと言われるのである。五七〇頁の書物のうち、二五三頁がアウグスティヌスに当てられていることから、

先生の関心がいかにアウグスティヌスに寄せられていたかは明確であろう。また先生の著作の中に、アウグスティヌスに関する論文が多いことからそのことは指摘出来る。第三巻には「アウグスティヌスの著作とキリスト教的性格」、「アウグスティヌスにおける歴史哲学的基礎概念」など、第四巻には、「アウグスティヌスの世界創造の思想」、「神国論におけるアウグスティヌスの歴史観」など、第七巻には、アウグスティヌスの歴史的背景と内的発展に関する諸論文が豊富に収められている。

第九巻の「キリスト教の展開」は、中世カトリシズム、宗教改革、近世キリスト教の三部から構成されつつ、中世カトリシズムが宗教改革の前提として位置づけられ、宗教改革がキリスト教の根本的展開と見なされているところに石原史学の特質があると思う。キリスト教の源流をアウグスティヌスを頂点としてまとめられたと同じように、キリスト教の展開をルターを頂点として構成された。六一三頁の本書のうち一八八頁をルターのために当てている点は興味深い。先生の宗教改革研究は、その研究対象、範囲からいって、文字通り宗教改革の全体を網羅するものである。しかし研究の焦点をキリスト教の本質の展開、十字架の神学に絞っておられたため、おのずからルターとドイツ宗教改革に研究が集中する結果となった。従って九巻以外に収録されている宗教改革に関する論文も、ほとんどルターに関連するものである。「宗教改革者ルターとその周辺」、「マルチン・ルターと宗教改革の精神」(第五巻)「ルターと神秘主義」

義」、「ルターの文化史的意義」(第六巻)などである。

このように見て来ると、石原先生の歴史はアウグスティヌスとルターという二つの山に向って展開されているように思える。すなわち、すべてのものがアウグスティヌスに流れ込んでも、そこからまた流れ出し、その次にはすべてのものがルターに流れ込んでルターから流れ出ているという展開である。ここに石原史学の特質があるのではなからうか。即ち、キリスト教史を単に歴史そのものを知るために研究するのではなく、「キリスト教とは何か」を出発点において、キリスト教そのものを理解するために研究することを終始貫かしたのである。この歴史研究の前提は先生のドイツ留学時代ハンス・フォン・シェーベルト博士より深く学ばれたと先生自身述べておられる。

「私は博士の講義とゼミナー、また懇切な個人的接触によって教会史、特に宗教改革史を学び、その後多くの著述を通してキリスト教史研究法とその視点とを理解し、その際受けた印象と興奮とは今なお忘れず、私のヨーロッパ史解釈の根拠をなしているようにさえ思う。」(第八巻、二四頁)偉大な人物に示されている福音の力を歴史的に究明しようとするシェーベルト教会史学の特質が、石原史学におけるパウロ、アウグスティヌス、ルターの一連の著述に大きく影響しているのではなからうか。

最近の歴史神学の研究業績が、教会内の研究者からよりも、教会外の研究者から多く出されているという傾向の中で、石原先生のキリスト教史のように、歴史的資料の分析と理論的研究

述べられた。(第十巻、二〇五頁)

最後に私事に触れることをお許しいただきたい。筆者は、石原謙先生が一九四〇年から一九四八年戦時下の厳しい時期に学長を勤められた東京女子大学において、先生から数々の貴重な教えを受けた。卒業論文のテーマに初代教会史を選び、先生の指導を仰ぎ度く御相談に伺ったことがある。ギリシャ語が読めないという理由で、他のテーマに変更を余儀なくされたのである。先生にとってキリスト教史は聖書の厳密な理解から始められなければならないかった。十一巻からなる著作集の第二巻に「旧・新約聖書」として、聖書註解が編集されていることから明らかである。七十余年にわたるキリスト教史研究を、ひたすらキリスト教理解のために労された先生の著作集から、今後多くの学びがなされることを期待してやまない。

(東京基督教短期大学教授)

このみ止まらないで、パウロ、アウグスティヌス、ルターにおいて働いた福音の力が現代に生きる教会と人格のいかに関わるかまで問うた教会史は誠に貴重であると思う。先生の米寿の祝賀の時には「アウグスティヌスの『告白』について」という小冊子を、お亡くなりになられた後には、「聖書と共に生きる—マルチン・ルターの生涯に学ぶ—」という抜刷を記念として親しい方々にお配りになられたことから、先生の二人の信仰、思想、生き方に対する真剣な期待がうかがえる思いである。

ヨーロッパ・キリスト教史の深い研究と理解に立って、「日本キリスト教史」を晩年にまとめられた。(第十巻)西欧キリスト教の成長と日本キリスト教史の展開とを比較検討して、日本のキリスト教の問題点をいくつか指摘しておられることに注目したい。日本の教会が西欧の教会に比べて社会性を欠き、力が弱い理由の一つに教会概念の不明確さを挙げておられることは興味深い。西欧社会においては、長い歴史の中で法組織の概念を勝ち取ったのである。日本の場合、教会は単に礼拝の場所と理解され、法的秩序によって構成される組織であるという認識が欠如している。日本の教会が西欧教会におけるような社会的基盤を勝ち取るためには、ヨーロッパ・キリスト教の源流と展開に学ぶべきであろう。「日本キリスト教史」の中で「私は長いキリスト教の歴史を無視し、聖書の権威を否み、自己の力と理解とのみに頼ることを欲しない。それは危険である」と

土肥昭夫著

『日本プロテスタント・キリスト教史』

一九八〇年 新教出版社

勝原 忠明

問題をはらんだ書

本書は問題をはらんだ本であり、挑戦的な本です。著者自身が『はじめに』の中で、「日本プロテスタント・キリスト教の流れの起伏をたどることは心掛けたが、それよりもむしろ問題史的・叙史的をこころみた」「キリスト教関係の有無を問わず、近代日本におけるキリスト教の意味を考えようとされる方がたに、何らかの学習の手引きになるならばと思つてまとめた」と述べておられるとおりです（四～五頁）。

歴史、とりわけ、キリスト教の歴史を叙述することの難しさは、単に「できごと」を紹介するところから（このことも難しいのですが）、できごとの意味をとりあげ、分析し、評価しようとする時に、極度に大きくなります。この点については、次のように述べられています。

「このキリスト教史も神学の一部門であらうとする以上、それを通してキリスト教とは何かを問おうとする。ところで、これを問うものは人間である。この人間が自己の感性や理性を用

いてキリスト教の本質的なものを問うのである。ところが、それを問うことは、逆に自分が問われることになる。なぜならば、キリスト教の神は世界を創造し、支配し、それを救う、生きて働く神であり、したがって人間とかかわり、人間に問いかける神であると信じられているからである」（二頁）。

こうして著者は「社会科学的分析」と「神学的分析」とを、同志社という、日本キリスト教史の資料の宝庫から、豊富な資料を用いつつ分析し、問題を提起していきます。ですから読む者もまた「問われること」と「問うこと」とをくりかえすことができるわけです。ヨーロッパ・キリスト教史に関しては、私たちは比較的客観的に、見ることができる立場にあります。冷静でもありうるわけです。しかし、日本のキリスト教史に関しては「時間的」に近いということ、「少数者の」歴史であること、「今おこりつつあること」と直結していること、などから、真に主体的なかわり方が求められます。その意味で、本書の『はじめに』は著者の立場を理解するために、また、私たちが著者に問うために、重要な部分だといえます。しかし、「福音主義」の立場から日本のキリスト教史が書かれる場合、どのような『はじめに』が書かれるのか、問われてもいるわけです。

全体と部分

さて、本書は十二章四十一節から成っており、各節に基本的

な資料のリストがついています。ですから、ひとつひとつの主題について更に学ぼうとする者にとっては「手引き」としての役割を十分果たしています。さらに、それぞれの章節がなかに独立した論文として読むこともでき、全体と部分とが実によく整合性を保っています。読者を十分に配慮した構成です。全体を通して読むことによって、基本的な問題をつかむことができ、興味ある部分をほりさげることによって、著者との社会科学

的、神学的対話の道が開かれます。

ただ、欲ばりかもしれませんが「年表」があれば、キリスト教史の全体像がつかみやすくなったのではないでしょうか。もうひとつ、これは内容には関係ありませんが、この種の書物に、写真や絵を入れることは邪道なのではないでしょうか。これは、コストとのかかわりもあるでしょうが、写真が入れば、堅さがほぐれ具体的になる効果が期待できるのではないのでしょうか。たとえば、ペイントンの『我ここに立つ』（聖文舎）が、内容の高さにもかかわらず、「親しみ」を感じさせるのは、ふんだんに用いられている絵なのです。また、川崎・笠原編『宗教史』（山川出版社）にも同じ手法が用いられています。著者は「数年前より、民衆史に注目し、その視点を取り入れつつ、日本キリスト教史の分析をはじめている」とのことです（七頁）。将来「民衆史の視点」からの日本キリスト教史が、著者によって著わされる時、民衆のすきな「絵」や「写真」を用いていただけではないかと思えます。

人と歴史

ルターは歴史を「神と人間と悪魔のドラマ」として扱えました。私の興味も人物史に、その中心がありますので、その面から、問うてみます。日本のキリスト教史におけるひとつの中心は「植村正久」を中心とする日本基督教教会でしょう。この植村について、著者は「土族出身の明治キリスト者の眼界」を指摘しています（一八五頁）。それは特に天皇制の問題に対する見識と「自己の内なる天皇制については、どれほどの反省と批判の眼を備えていたのだろうか」という問いになります（二二四頁）。

これは特に『第三章、天皇制確立期のキリスト教、3、田村直臣「日本の花嫁」事件とキリスト教の戦争協力』の項で述べられているもので、従来、『日本の花嫁』事件では、植村の立場から、田村の人となりや「母国への愛情と責任をもたない上ずった外国崇拜がキリスト教の形をとって表現された」（『近代日本とキリスト教』創文社、二二五頁）といった批判が主なものでした。これに対し、著者は、田村の『日本の花嫁』が「指摘した日本の女性差別や非人間的道徳は決して間違っていないし、キリスト教をもってこれを変革しようということも『教師にあるまじき』主張ではない」といいます。そして、田村が日本基督教教会大会から「教職を免」じられた背景のひとつに「田村と、植村に代表される、いわゆる横浜・バンドとの根深い対立があった」更に「田村に対する植村の感情はかなり陰険であった」といい「両者の陰湿な関係はその後も続き、植村の死後田

村の教会復帰がやっと実現した。このことは、日基が植村を頂点とするピラミッド的秩序の集団であり、いいかえれば植村がこの教会の『小天皇』であったことを示す一証拠となるだろう」と結論づけています。

教会の指導者や牧師が心しなければならない点がここにあります。福音を語る者、教団の政治にあずかる者が、姿勢を正すことができるのは、植村のような偉大な人物の光とともに影をも語る、このような鋭いことばに出会うときではないでしょうか。

天皇制についての問い

本書につらぬかれている問いのひとつは「天皇制の問題」です。日本の歴史の中で、政治体制が変っても天皇家は変わることなく続いてきました。明治維新の時も、第二次大戦後も、これは変わりませんでした。その意味ではまさに、天皇は、日本の（政治的、文化的、宗教的）シンボルであり続けたのです。本書の最後に「しかし七〇年代になって、天皇が政治舞台にあらわれるにともない、靖国問題の本質は天皇制にあり、その宗教的な天皇信仰によって国民感情の統合をめざす手段であることが明らかになってきた。したがって靖国闘争は近代日本のキリスト教があるときは奉仕し、あるときは屈服し、あるときは回避してきた重い歴史的課題を担っていく運動になったのである」といわれています（四五六〜七頁）。

この「重い歴史的課題」は、戦後「個の救い」を中心に伝道活動と形成を続けてきた福音派の諸教会も担わなければならない課題です。

神賛美としてのキリスト教史を

「キリスト教史を学ぶものはこのような歴史的教会の歩みをとらえ、教会を通して神のことばとわざにふれ、その神のさばきとゆるしの下にある教会を問いただしていく課題を負っているのである」（二頁）。

もしそうであるとすれば、私たちは教会史においてこそ、神のさばきとゆるしを明確に見ることをゆるされ、更に、現在自らが営んでいるキリスト教信仰と神学をも、神のさばきとゆるしのもとにおくことができるわけです。著者が試みはじめておられる「民衆史」の視点からのキリスト教史が公にされる日が一日も早くきてほしいと願います。このような大胆な視点からこそ、教会は新しい展開へのいとぐちをつかみ得るでしょう。

狭義の福音主義神学が、「神の人間への働きかけは、イエス・キリストの啓示により、聖書の証言を通じ、教会において伝達されるものと信じられている」という著者の立場に対して、単に「聖書は誤りなき神の言」という立場をとりかえすだけに終ってはならないでしょう（二頁）。むしろ『福音主義神学第十号』の高橋久之氏の『教派形成の展望』のような論文がつか

さねられることによってこそ、道が開かれるものと思います。

本書は、福音主義神学の立場からの、日本プロテスタント通史が公にされるまでは、常に鋭い問いと挑戦とを私たちに与えつつけることでしょう。

（西日本福音ルーテル教会西明石教会牧師）

泉田 昭

一九八〇年 いのちのことば社

カール・F・ヴィスロフ著 鍋谷堯爾訳
『キリスト教倫理』

カール・F・ヴィスロフの『キリスト教倫理』を読んだ第一印象は、成熟した神学者の穩健な倫理ということである。それに、日本語の訳文もよく、とても読みやすい。

ヴィスロフ博士は、ノルウェーにおける敬虔派の流れを汲むルター主義神学者であり、オスロー独立神学校で教えるかたわら、国際キリスト者学生連盟の総裁としても幅広く活躍して来られた方である。神学と実践の両面にわたって国際的に活躍されただけに、その視点は聖書と世界の隅々にまでしっかりと据えられ、思想と生活が美しく調和している。

『キリスト教倫理』は、大きく四部に分れている。

第一部においては、人間が人間として生きる倫理的基盤に言及している。人間は誰でも行動の基準をもっており、それが何であるかを自覚的に問うことからはじまっている。

「これについては多くの答を考えることができる。しかし、それらの立場を概観するとき、ある留保条件つきであるが、二つのグループに大別できるのである。一つは、行動の目標に重

点を置くやり方である。もっと正確に言えば、私たちの生活様式や行動によって得ようとする結果に焦点を置いている。この基本的な立場は、普通、功利主義と呼ばれる。第二のグループは、道徳的に責任を持つ人間の動機に重点を置いている。正しい動機から生じた行動は正しいと考えられる」(15頁)。ヴィスロフは、このような分け方によりつつ、功利主義、実証主義、権力主義、動機づけに主眼点を置く倫理、実存主義、決疑論に言及する。しかし、それらのすべては、倫理基準の出発点がいずれも人間の側に置かれていることを指摘し、それに對しキリスト教倫理は「聖書に基づき、神のみことばの上に立てられている」ことを強調する。

第二部においては、クリスチャン生活の基準が扱われている。まず、神の御旨はどのようにして知ることができるかが問題とされ、神学者らしく手固くまとめておられる。つまり、自然啓示、良心、聖書等によって知るのであるが、問題となる周囲の影響、状況倫理、使徒の権威にも言及しておられる。ルーテル主義神学における律法の三つの用法の理解は興味ぶかい。ヴィスロフはさらに「神の御旨と人間の考え」についても論を進め、人間の自由意志、人間のうちにある善なるもの、奴隸意志、新生等の諸問題が扱われている。

第二部で興味深いのは「神の御旨と隣人」で、隣人に出会う時、実は神にお会いし、自分の生活に対する神の求めに對決している事実が強調されている。ここに、キリスト教倫理の基本

的モチーフがあるからである。

第三部においては、クリスチャン生活の場が扱われている。第一の場は家庭であり、結婚、夫と妻、出産、子供の教育、家庭礼拝、等の諸問題について適切な助言的論述がされている。しかし、人工受精、人工流産、性的プレッシャー、離婚、老人問題等、今日的でしかもキリスト教倫理における微妙な問題についても手固く語られている。第二の場は教会であり、教会とは何かからはじまって、万人祭司制、牧師、交わり、戒規、健全な教えを守るための戦い、礼拝、教会組織、奉仕等の諸問題が、福音的ルーテル主義の立場から要を得て述べられている。第三の場は社会であり、特に労働と文化の問題が扱われている。それは、基本的には神のための奉仕であり、また人間に対する奉仕である。仕事への誠実、労働の人間性喪失、産業化社会、自然破壊、富める国と貧しい国、文化、芸術、マス・メディア等の具体的諸問題が論じられている。第四の場は世界であり、民族、国家、人類の諸問題が扱われている。民族の連帯、人種、国家、聖書的な政治形態は存在するか、二王国論、教会専制主義、国家社会主義、共産主義、後進国援助、正義への責任、資源問題、より質素な生活等の諸問題が論じられている。ノルウェー・ルーテル主義という色彩はあちこちに濃く滲み出ているが、今日的諸問題が健全な良識によって巧みに語られている。

第四部はクリスチャン生活の実践で、そこでは、敬虔のための自己鍛練がすべての基本となっている。「敬虔のために自分

を鍛練しなさい」(一テモテ四7)の使徒パウロの言葉を基盤とし、折りの生活、クリスチャン生活、職場での敬虔さ、猥褻の自己犠牲、アディアフォラ(聖書の中に明白に禁じられてもいないし、また、許されてもいないこと)、酒とタバコ、倫理的なバランス、倫理的な尊さ、病氣、十字架、試練と誘惑、死への準備、最後の勝利について、すぐれた勧めと励ましが行なわれている。

カール・F・ヴィスロフの『キリスト教倫理』には、幾つかのすぐれた特色がある。

第一は、健全な信仰と倫理である。敬虔なルーテル主義に立つ神学者であり、聖書の読みは適切で深い。それだけに、危かしさがなく、批判するべきものは何もない。キリスト者の生き方についても、聖書的であり良識的であって、読みながらうなずくことばかりである。

第二は、絶妙な調和である。信仰と現実、ノルウェーと世界、聖書と現代と言ったいわばあれかこれかを求める二つの傾向をもった諸問題が、心理的に緊張関係をもたらずのではなく、むしろ読む者に心地よい解決を与えてくれる。誠にバランスのとれたキリスト教倫理である。

第三は、成熟した倫理である。多くのキリスト教倫理、特にキリスト教社会倫理は、鋭い問題意識を投げつけ、難解な言葉を浴せかけて、読む者をつかれさせるだけである。しかし、この著書にはそのようなものはない。成熟したキリスト者の生き

方が、すべてにおいて味わい深く語られている。

しかし反面、共に考え続けたい、幾つかの問題もある。

第一は、歴史における世俗化とキリスト教倫理の役割である。日本では、クリスチャン人口は僅かパーセントであり、キリスト者であることには多くの戦いがある。ノルウェーは、いわゆるキリスト教国であるが、また世俗化の波に苦しめられているようである。それは、次の言葉によってもうかがえる。

「今日のノルウェーの法律では、女性が妊娠中絶する権利を認めている。それが許される条件は非常に広いので、実際には、胎児の生命の尊厳は無視されてしまっている。これは、ノルウェーの社会がキリスト教の考え方からどれほど離れてしまったかを示す非常に残念な例である」(78頁)。

「今日のノルウェーの教会では戒規を執行することが非常に難しい。国教会組織では、国民が教会そのものであって、国籍を持つことは、教会の籍を持つことになっている。このような状態では、聖書に基づいた戒規を執行することはほとんど不可能である」(117頁)。

この種の記述は案外多く(102、106頁)、激しい世俗化の時代の中に生きているキリスト者の倫理の確立が、あらためて求められているようである。私たちは、そのために真剣な努力を続けなければならない。

第二は、現実の問題に對する共通の理解を育てることである。同じキリスト者であっても、国籍やイデオロギーによって

現実の諸問題に対する考え方に相違がある。戦争と徴兵について、ヴィスロフは次のように述べている。

「国際的に見ても、他国を侵略し、他国の平和と安全を脅かす専制国家が存在するから、防衛を固め、専制者の攻撃に対する自衛手段を備える必要がある。全く無条件に兵役を拒否する人は、問題をあまりに狭く見すぎている」(209頁)。

この問題について、日本、アメリカ、ソ連のキリスト者は、それぞれのようによく考えているのであろうか。同じ聖書から同じ理解を得ることは不可能なのであろうか。

第三は、個人的な思いであるが、成熟と怠慢ということである。ヴィスロフの『キリスト教倫理』を読み続けているとき、その成熟した信仰と倫理に深い感動を憶えた。しかし、また私たちの怠慢がたえず責められているような思いにも襲われ続けた。このような「キリスト教倫理」が、あたかも当然のこのように翻訳されるのではなく、日本の教会によって産みだされてられないのであろうか、という思いである。

(日本バプテスト教会連合練馬教会牧師、聖契神学校・東京基督神学校講師)

松本滋 著

『宗教心理学』

一九七九年 東京大学出版会

藤 巻 充

一 この書の宗教学研究書における位置付け

長い間、東京大学宗教学宗教学史学科の主任教授をされていた岸本英夫氏は、昭和三十六年日本人としてはじめて宗教学に独自の体系を与えた「宗教学」を出版されました。その後、岸本英夫編で、岸本門下生によって宗教学の立場から書かれた宗教史のテキストとして、昭和四十年に「世界の宗教」が出版されました。次の年、同じく岸本門下生のひとりであられる藤田富雄氏によって、宗教学的宗教哲学である「宗教哲学」が出版されました。それから十四年たった去る昭和五十四年に、同じく岸本門下生であられた松本滋氏によって「宗教心理学」が出版されたのです。

岸本門下生によるこれらの書物は、それぞれ岸本宗教学を基礎として宗教史、宗教哲学、宗教心理学の領域への展開を計ったものと見てよいのです。宗教学を狭く理解するか、広く理解するかの問題は別として、神学の立場を除いて、岸本宗教学の立場から宗教学の全領域への展開が計られていることになるわけ

けです。そのようなわけで、この「宗教心理学」は、そのあとがきにも明記されていますように、岸本宗教学の宗教心理学への展開と見ることが出来ます。

(特にここで記す必要はないのですが、評者は、岸本宗教学を援用してキリスト教神学を叙述したいと考えています。)

二 著者の本書執筆のねらい

著者松本滋氏は、昭和八年生まれ。昭和三十年、東京大学文学部宗教学宗教学史学科を卒業され、昭和四十二年、ハーバード大学から Ph.D. の学位を受けられました。現在、聖心女子大学教授。

この書のとがきから著者のねらいを見てみます。

著者は、岸本英夫氏から指導を受けて宗教心理学の学びをはじめてから約二十年の学びを経て、現時点で、「宗教心理学」に一つの体系をあたえることを志しているのです(二〇二頁)。それは、また、このような書物が、今田恵氏の宗教心理学(昭和九年初版)と竹中信常氏の「宗教心理の研究」の二冊ぐらいいしかないという現実から、何とか、古典的な宗教心理学の成果と近年における社会、人文諸科学における宗教心理関係の研究動向とを併せおさえ、しかも、それらを人間の精神発達というタテの線に沿って総合しようと試みているのです。

その際、岸本氏から松本氏が教えられた三つの点が、宗教心理学叙述の際にも根底に置かれていと述べられています。その

三点とは、第一は、宗教現象を人間の営みとして広く暖かい目で見ることが、第二は、宗教一般を説明するきめて(料理法)を求めること、第三に、その成果をやさしく表現することのことです(二〇二頁)。

三 内 容

序章 「宗教学と宗教心理学」

宗教心理学には、心理学の立場から宗教心理学を研究する宗教心理学と、宗教学の立場から宗教心理学を学ぶ宗教心理学の立場があることを述べ、自分の立場が、後者の宗教心理学の立場であることを明言しています。宗教心理学では、通常、宗教心理学が、人間心理の一つの特異な形態、あるいは様相として扱われるのに対して宗教心理学は、宗教のもつ独自の心理的機能、自律的な動機、構造を明らかにするものと規定しています。

第一章 宗教心理学の方法

宗教研究における三段階の手続きとは、対象の規定、対象の資料化、比較と体系化です。それをふまえて宗教心理学の方法が紹介され、宗教の内的理解が「共感」の立場であるとされています。

第二章 宗教の概念規定

宗教の概念は、「究極性」にその特質があります。そして、その究極性は象徴に表わされます。そして、象徴はまた、逆に、

究極的関心を喚び起こす力をもっているのです。このような究極性と象徴との間にある相関的構造こそ、象徴という営みのきわめて重要な核心と言えます。そこで、宗教とは、究極的関心にもつたる象徴の体系だと言えるのです。

第三章 幼少期の宗教心理

幼少期の宗教心理では、ピアジェの理論から精神発達段階が紹介され、さらに、その発展段階にフロイトとエリクソンの理論から深層心理学的説明がされています。

第四章 青年期の宗教心理

青年期の心理では、宗教の役割が、アイデンティティーの確立のためであると見られています。

第五章 成人期の宗教心理

若年成人期における「親密性と孤立感」、壮年成人期における「生殖性と停滞感」、老年期における「統合性と絶望感」という矛盾した概念の中で、宗教のはたす自己実現の境位が述べられており、その究極的解決策としては宗教神秘主義が示唆されています。

四 この書に対する批評

(1) 独自の体系の未確立

筆者は、この書の論述に当って、過去の学者たち、フロイト、ジュームス、ピアジェ、エリクソン、オルポート等の見解を、あちこちに紹介しています。それは、たしかに良心的で、

一般読者にとって必要なことでもあります。筆者自身が、これらの学者の諸見解を自分なりに消化し、まとめて、自分なりの「独自の体系」が確立していない感があります。先輩の学者の見解を公平に重んじようとするために、やむを得ないと思われるかもしれませんが、もっと「自分なりの宗教心理学の体系的論理」が必要と感じました。筆者が、この書を自分なりの体系を与えたいとの意図をもって書こうとしている点から考えると、いまだ達成されていないように感じました。

もちろん、日本人の書いた「宗教心理学」の書物という意味では、高く評価いたしますが、今後は、宗教心理学の学問的方法論と対象の明確化を計り、これまでの諸見解をのり超える必要を感じました。

(2) 発達心理学的でない、新しい論述方法は出来ないものか
これまでの学者たちが、多少の差はあれ、幼少期、青年期、成人期と分けて論述しています。だから、筆者が、それに沿って論述されているのは、無理からぬことと思います。しかし、宗教心理を取扱う場合、人間を幼年期、青年期、成人期と分けて論述するのは、余りにも人為的ではないかと考えます。と言いますのは、青年期の宗教心理には幼少期との深い関係があり、成人期の宗教心理には、青年期にも幼少期にも深い関連があるからです。成人期のところで取扱われている「死への準備」や「神秘主義」の項で、現実はずしもそうでないとの実感を感じています。特に神秘主義は、青年期に特徴的な表われ

方をしているからです。ですから、幼少期、青年期、成人期と分けないで論述する方法がありはしないかという点です。この点、例えば、日本人の宗教心理、アメリカ人の宗教心理、……また、キリスト教徒の宗教心理、仏教徒の宗教心理、回教徒の宗教心理……いずれにせよ、何かの論述方法で宗教心理学を新たに表現出来ればと考えています。

宗教心理学の体系的論理とは、その学問の対象と方法の明確化を意味するわけですが、筆者には、もっと「独自の体系的論理と叙述方法」を期待しています。(昭和五十六年六月)

(日本ホーリネス教団井土ヶ谷教会牧師、東京聖書学院教授)

南アフリカ改革派教会の歴史とその神学的現状

三野孝一

我々は歴史の中に神によって建てられた教会及びその神学を見る時、その教会の歴史的体験がその教会形成、信仰、さらに神学に大きな影響を与えることが教会史を通して知られる。南アフリカの改革派教会は *Nederduitse Gereformeerde kerk*, *Gereformeerde kerk*, *Nederduitse Hervormde kerk* の三教会により代表される。

ここでその歴史的背景を通して神学的現状を述べることにする。

一六五二年、南アフリカにオランダ東インド会社 (*Verenigde Oos Indiese Kompanjie*) を通じてオランダの移民が始まり、それと共にオランダ改革派キリスト教がその国家の植民地政策の一環として移植された。この教会は北オランダの *Klasis van Amsterdam* の元指導者 *Heiderburge Katedrales*, *Nederlandse Geloofbelydenis*, *Dordse Leerreis* を採用し、その教会規定は *Dordse kerkorde* であった。しか

し、現実の教会政治は、オランダの当時の母教会と同じく国教会という政治形態であった。一六八〇年ルイ十四世のプロテスタント迫害により逃亡したいわゆるフランスユグノーがオランダを経由し、この改革派教会に融合し霊的な励ましを与えた。当時教会の神学書は *Z. Ursinus* の *Heiderberg katechismus* である。

一八〇六年以来、ヨーロッパの政治情況の変化に伴ないケープはイギリスの支配におかれる。この時以来、オランダからの牧師の派遣が不可能となりイギリス政府の植民地英国化政策、他方牧師不足という情況で、この改革派教会にスコットランド長老教会から、教師が派遣され、一八二四年に第一回教会会議 (*Synode*) が開かれ、形式的にはオランダの母教会から独立することになる。一八四〇年頃、改革派教会の五〇%の教師はスコットランド出身であった。一八三四年頃から、イギリス政府の植民地におけるイギリス化政策、さらに博愛主義の名の元にオランダ系白人の弾圧が始まるにつれて、オランダ系白人の北への移動 (いわゆる *groot trek*) が一八六六年頃まで続き、それと共に教会も現在の *Transvaal*, *Oranje vrystaat*, *Natal* と拡大発展して行く。

この間ケープ州では、スコットランド系教師による信仰再生運動、福音賛美歌の導入が改革派教会の中で強調される。この中で神学的指導者は日本でも知られる *Andrew Murray* である。この傾向に対して、*N. G. K.* の中のある信者はオランダ

改革派教会の伝統の立場から反発し、オランダの *Christelik Afgeskeide Gereformeerde kerk* にちの派遣された *Postma* 牧師により一八五八年 *Gereformeerde kerk* が建立、さらにオランダ系白人のナショナルリズムの背景から国家教会を基礎とする *Nederduitse Hervormde kerk* が *N. G. K.* から分離する。一方 *N. G. K.* は、一八六二年の司法局の決定によりケープ州と他三州は分離した型となり、*N. G. K.* は、一九六二年始めて南アの独立と共に四州合同、南アフリカ・オランダ改革派となる。この流れの中で、オランダ母教会の自由主義化を前にナショナルリズムも手伝って、一八五九年 *Stellenbosch* に神学校が建立され、初代教授に *John Murry*, *N. J. Hofmeyer* が選出される。

この様に南アフリカにおける改革派教会の歴史を見る時、この教会は国内外の政治・社会状況と深く結びついていると共に、オランダ系白人のナショナルリズムとの関係も見逃されてはならない。そのことは、一八九九年〜一九〇二年のイギリスとオランダ系白人間の自由戦争 (いわゆる *Angro-boer oorlog*) 明らかに一九四八年オランダ系白人 (アフリカーナ) の支持政党国民党 (*Nasionale party*) の勝利にも明白にされる。

他方、純粋な神学問題について二、三の出来事を通じ、南アフリカのオランダ改革派教会の神学的立場を見ることにする。一九二〇年代の後半、*Stellenbosch* 神学校の教授 *J. du Plessis* は、旧約聖書における「いわゆるモーセ五書のモーセ著者性」

否定、*S. R. Driver* 的 高等批評の受容と *ヘンリッヒ* 宗教史の再構成 (*Wellhausen* とは異なる) の *やうな聖書の形態 (vorm)* の神学起源の否定 (*the Scripture is the Word of God* の区別) などを主張、一九三三年司法裁判にまで発展したが除名された。この後、*N. G. K.* の各四州の *Synode* は伝統的改革派三信条の再確認がなされた。この論争の一方には、オランダに在る *A. Kuyper* にちのて建立された *Vrije Universiteit (アムステルダム)* の存在を見逃すべきではない。当時 *Stellenbosch* 大学の神学部は *A. Kuyper* や *H. Bavinck* によつて強い影響を受け特に *prof. B. B. Keet (Stellenbosch)* は *H. Bavinck* の元で学んだ教義学者である。やうに一九三七年建立された *Pretoria* 大学神学部の *prof. A. B. du Preez* も同様であり、両者は *カール・バルト* を意識した。現在 *Prof. D. W. Jonker (Stellenbosch)*, *prof. J. A. Heyns (Pretoria)* も同様の立場である。他方旧約の高等批評に関し「言え、*prof. A. Van Selmo*, *H. Van Zyl (Pretoria)* *P. Verhoef*, *C. Fensham D. Odendaal (Stellenbosch)* は、伝承史的視点を受け入れつつもいわゆる文書仮説は受け入れない保守的立場を維持している。

他方、他の二改革派教会については、第二次大戦におけるオランダの改革派教会の動き、特に *G. K. N.* の *Kuyper* 批判 (「彼の聖書引用の問題」一般恩恵論など *De Jong: Nederlandse Kerkgeschiedenis 1972 p. 402* 参照) が起り、*K.*

Schinder の除名問題が起ったが、南アフリカの Gereformeerde kerk においては prof. C. J. H. de Wet (Potcheitstroomse Universiteit vir Christelike Hoër Onderwys) が信条と異論を唱えたが一九四六年、教会は聖書は神の言葉、さらに三信条の受容を確信した。この教会は現在、詩篇のみを礼拝で使用し、非常に保守的改革派信仰を保っている。

その次に Nederlandse Hervormde kerk の prof. S. P. Engelbrecht と A. Kuyper の神学を “gereformeerde skolastiek” (改革派スコラ主義) として G. K. の Dr. J. V. Coetzee とネオ・カルビニズム論争をなし、Volkskerk idee in sin van die confesionele praktijk (告白的実践という意味での国家教会主義) という教会の立場を主張した。これはオランダの N.H.K. の立場である。

この間二つの世界大戦をイギリスの植民地という立場にあったアフリカーナの中から、力強いナショナリズムが起り、一九三三年、始めてのアフリカンス聖書の翻訳出版があり他方アフリカーナの都市流出、共産主義の影響ということもあり、キリスト教カルビニズム国家主義運動があり、このことからアフリカ伝道の意識の高まり、南アフリカ内のオランダ系白人の将来に対する人種問題ととりくむことになる。この結果アフリカーナの学者、教会神学者は、正当な人種分離 (Regenend nase apartheid) という問題に集中した。教会はあくまで非政党性を支持しつつも過去の伝道体験から、教会の分離、発達におけ

る自律、独立を受け入れることになる。この論争の土台として用いられたが A. Kuyper の Eenvormigheid de Vloek van het Moderne Leuen である。特に nation as on organism with its own spirit という考え、その議論については、改革派神学 15 号、一九七九、一七六を参照) 一九五〇年からの雑誌 Die Gereformeerde Vaandel (改革の旗) の新版第一号から、この問題を取り扱っている。N. G. K. は一九七四年の総会が、この問題に関する公的見解を公にした。そのタイトルが “Ras, Volk en Nasie en Volkerenhouidige in die lig van die Skrif” である。これに対する反論も多くある。特にステレンボッシュ大学宣教学教授 N. Smith は彼の論文において教会の分離は理論的、神学的問題ではなく、あくまでも、体験的実践的な問題であることを主張している。(Die planting van afsonderlike kerk vir Nie-Blanke bevolkings-groepe deur N. G. K. in S. A. 1972)

その次に prof. D. F. M. Strauss (Universiteit van Oranje-Vrystaat) は “An Analysis of S. A. Calvinist Theology” という論文の中で、南アのカルビニストは Kuyper の定義に従って言うならば、キリストの体である有機体的教会と制度としての教会の区別がされていないということを主張し、南アのカルビニストを分析している。特に南アのカルビニストの特徴は、聖書ファンダメンタリストで、聖書のモチーフを直接的に現在

状況に適用し、あることを批判しさらにキリストにより再生された真のぶどうの木としての教会、領域主権を強調している。ここで補足として言及するが Universiteit van Oranje-Vrystaat の哲学部は H. Dooyeweerd の研究でこの国では知られている。

この白人側からの神学に対して注目されているのがいわゆるアフリカの「黒人神学」である。一九七一年五月、Die Universiteit van die Noorde (黒人大学) で南アフリカ学生機構 (South African student Organization) の会議でそのテーマは “Black Consciousness Rivalry” であり明白にされた黒人神学は、Black Christ, Black Messias であり、神への仲保者は、白人のそれとは、区別される。ここには明白な、マンチ白人がある。

南アフリカの改革派神学は、現在この人種問題、さらに黒人神学をその大きな課題としている。この論議の土台となるべき雑誌が一九七二年より出版されている “Journal of Theology for Southern Africa” であり、アフリカという状況を考えた神学的創造が民族を超えてなされていることは注目に価する。この雑誌は、南アフリカ教会会議からの出版といえる。あるが多くの白人改革派牧師も執筆している。

南アフリカの改革派教会を中心とした神学的遺産について
一九八〇年南アフリカ大学 (Universiteit van Suid-Afrika)

の神学部教授によって出版された “Suid-Afrikaanse Teologiese Bibliografie” が良き参考書となる。この中には南アで過去出版、公表された神学に関する論文、雑誌、博士論文が一九七七年までのものまですべて記載されている。

最後に、南アフリカの改革派教会の神学教育機関を紹介する。これらの教育機関はすべて国立大学の中に存在している (南アには私立大学は存在しない)。

Nederduitse Gereformeerde Kerk

- Stellenbosch 大学、神学部 (一八五九年創立)
- Pretoria 大学、神学部 (一九三七年創立)
- Oranje Vrystaat 大学、神学部 (一九八一年創立)

Gereformeerde Kerk

- Potcheitstroomse Universiteit vir Christelike Hoër onderwys (キリスト教高等教育のためのポチストローム大学)

この大学に Instituut vir die beoording van

Calvinisme (カルビニズムの発展のための研究所) がある。

Nederduitse Hervormde Kerk

Pretoria 大学、神学部

さらに改革派教師により構成されている神学部として

Universiteit van Suid-Afrika (通信教育制の大学)

• N. G. Sending Kerk (カチャー)

Wes-Kaap (西ケープ) 大学、神学部

・ N. G. K. in Afrika (黒人)

主として Turfloop, Witsieshoek, Decoligny Dingaanstat
などこれらは白人教会の援助による。

さらにギリシア語、セム語、キリスト教哲学については、各大学の教養学部各学科がある。

南アフリカの改革派教会の神学については、アフリカーンスという言語の問題があるが、世界に知られていないのが残念である。オランダの改革派教会が自由主義的傾向にあるのに対して、南アフリカの改革派教会が伝統的改革派信仰を保持し、高度の神学的営みがなされていることに世界の改革派教会は注目されるべきであろうと確信する。

(南ア・ステレンボス大学、神学部博士論文執筆中)

全国理事会報告

(一九八一年五月十八日、お茶の水にて)

一 全国理事会人事について

(一九七九年度のままとする)

理事長 鍋谷堯爾
副理事長 丸山忠孝
書記 高橋久之
編集 橋本龍三、西満、山口昇
会計 今野孝蔵
渉外 佐布正義

二 一九八一年度事業計画について

- ・ 東西合同研究会議の開催
- ・ 地区活動の育成、援助
- ・ 国際交流をはかる
- ・ 学会(全国)ニュースの発行

三 「学会誌」の発行について

年間収支は黒字であるが、「学会誌」印刷のための資金繰りが困難である。そのため出版基金設置の方向をさぐるため、東西両部会より委員を出して検討、実施する。

四 会員名簿の発行について

当学会の東西両部会の会員名簿が、この所別冊で出されているが、名簿利用の目的を考え、合冊で今夏発行する。

五 日本伝道会議(一九八二年)について非公式の協力打診があったことについて

日本福音同盟(JEA)よりの正式の申し入れがない事と、学会員の中での評価と対応について必ずしも統一的結論が出せないで、学会としての判断はさける。

東部部会活動報告

(一九八〇年十月から一九八一年六月まで)

東部理事会書記

大滝 信也

一九八〇年度

一月二一日(金)午後六時より八時までお茶の水学生キリスト教会館J・P・C会議室を会場に理事会が持たれた。出席者九名、欠席者二名。この時、一月一日の「第一回研究発表会・講演会」の最終的な打ち合わせをした。また同時に、入会希望の三名を審査し、それぞれを正会員として認めた。

二月一日(月)午後一時三〇分より八時三〇分まで「第一回研究発表会・講演会」を主催した。会場はお茶の水学生キリスト教会館ホール。午後一時三〇分より二時まで礼拝を持ち、中村寿夫氏の司会で、湊晶子氏が説教した。午後二時より五時までの研究発表では津村俊夫氏の司会で、清水武夫氏が「アケダ(創世記二二章)と新約聖書の救済論」、松本任弘氏が「エルサレム郊外西方の謎の塚」、内田和彦氏が「親切的な雇い主のたとえ(マタイ二一・一一一六)——イエスの言葉の真理性についての一考察」、大滝信也氏が「フランシス・タレティンの『赦し』の理解についての一考察」という題で発表した。午後七時より八時三〇分までの講演会では、神学会西部部会理

事で奈良女子大教授の清水汎氏の「さんびの歌とほろびの歌」という題の講演があった。司会は大山武俊氏。出席は五〇名ないし六〇名だった。今回の発表会では若手の発表者があったのはよい、との評価が理事会でなされた。

一月二三日(金)午後六時より八時三〇分にお茶の水学生キリスト教会館J・P・C会議室を会場に理事会が開かれた。出席者二名、欠席者九名。この時、一月に予定されている東西合同研究会(後に、正式な名称は「第一回福音主義神学研究会議」と決定)の準備委員として東部より宇田進氏と大滝信也氏を選出した。また、一九八二年六月に予定されている日本伝道会議には基本的な線で協力する用意のあることを確認した。さらに、春の総会と講演会のための計画と準備をした。

三月二〇日(金)午後六時二五分より九時四〇分に中央福音教会を会場に理事会を持った。出席者二名、欠席者九名。

一九八一年度

五月二一日(月)午後一時三〇分より八時三〇分に「第二回総会・シンポジウム・講演会」がお茶の水学生キリスト教会館ホールを会場に開かれた。午後一時三〇分より二時の礼拝では、内田和彦氏の司会で宮村武夫氏が説教、二時より三時の総会では司会が丸山忠孝氏、書記が大滝信也氏で審議が進められた。三時より五時のシンポジウムでは、「医学倫理をめぐって」との主題のもとで、福音主義医療関係者協議会長で群馬大

西部部会活動報告

(一九八〇年十月より一九八一年七月まで)

一 第六回西部部会総会

四月二十日(月)一三時より神戸基督教改革宗長老教会にて開催

○礼拝

聖書 エゼキエル一章一―三節
説教 有賀喜一理事

○議事

議長 鍋谷堯爾師
(一) 活動報告―秋期講演会(十一月十七日)、新年講演会(一月一―二日)を中心になされた。現在正会員百二十名、準会員十名で昨年より正会員四名増、準会員二名減少と報告された。さらに一九八一年十一月に開かれる東西合同研究会議(仮称)の経過報告あり

(二) 理事改選―郵便投票により、八十二名が投票。服部嘉明、鍋谷堯爾、有賀喜一、橋本龍三、中島寿、松田一男の諸氏が一九八三年度までの理事として選ばれる。次点者は富井悠夫氏である。

(三) 決算報告の承認

(四) 予算案の審議ならびに承認(略)

教授の黒住一昌氏と順天堂大助教授の稲葉裕氏が発題、泉田昭氏が代表質問に立った。司会は大滝信也氏だった。七時から八時三十分の講演会では、佐布正義氏の司会で、オランダのアムステルダム自由大のE・スフールマン氏が「キリスト者の責任ある思想と行動」と題して講演。通訳は有賀寿氏。

六月一九日(金)午後六時より九時にお茶の水学生キリスト教会館J・P・C会議室を会場に理事会が持たれた。出席者七名、欠席者二名。この時、入会希望の三名と一神学校について審査し、二名を正会員として、西部よりの転入を希望の一名を準会員として、一神学校を賛助会員として認めた。

一九八一年二月六日(金)午後七時より九時まで聖契神学校を会場に旧約部会が開かれた。なお、一九八〇年十月よりこの旧約部会時までは各部門部会が開かれなかった。二月六日の旧約部会以後の各部門部会については、今夏出る予定のJ・E・T・S ニュース(全国ニュース)第三号を参照のこと。

(以上)

○研究発表(シンポジウム)

「救済史の問題について」

安田吉三郎、服部嘉明、橋本龍三の三氏に福音主義神学第一号の上沼昌雄氏の掲載論文を参考にして発題していただいた。

二 理事会活動

○一九八〇年十二月二十九日、神戸ルーテル神学校にて主要議事

○第六回西部部会総会準備

○理事改選の手続き

○来年度の活動方針

東西合同研究会議(西部より服部、高橋両理事派遣)他地区への活動援助

○会員審査の結果次の四氏を受け入れる

郡山文郎氏(高校教師)

奥深山頼義氏(同盟高山教会牧師)(転会)

増田祈氏(北九州キリスト教会牧師)

吉井秀人氏(遠賀キリスト教会牧師)

○一九八一年四月二〇日(総会終了後)

本年度理事の人事について

理事長 鍋谷堯爾氏(留任)

書記 高橋久之氏(留任)

会計 工藤弘雄氏(留任)

編集 橋本龍三氏(留任)

他。中島守、松田一男、泥谷逸郎、有賀喜一、清水汜、奥川泰弘、五島勝、服部嘉明の十二名の理事が理事会を構成する。

○会員審査の結果次の諸氏を受け入れる

鷹取裕成氏(改革派、灘教会)

竹内豪氏(KGK主事)

秦賢司氏(夙川聖書教会牧師)

牧田吉和氏(改革派名古屋教会牧師)

多久和律氏(東姫路ルーテル教会伝道師)

帆の下照光氏(樺原ルーテル教会伝道師)

○東西合同研究会議について

同準備委員会での準備作業の了承と、諸人事について検討をする。

また、西部よりの参加目標を五十名とする。

○一九八一年六月五日、神戸改革派神学校

○会員名簿の作成、印刷について

今夏発行を目標に準備中と鍋谷理事長より報告あり、又印刷費は東西両部会より、三〇、〇〇〇円ずつ支出する件を了承。

○中部、九州地区の開拓について

中部地区には、七月、鍋谷、橋本両理事が出かける。

九州地区は、在住会員に働きかける。

○出版基金設置と善後策について

現在学会誌出版の資金の慢性的不足解消のため「出版基金」を設置することが全国理事会で話し合わせ、西部部会より高橋理事がすいせんされた。

○東西合同研究会議について

○会員審査の結果次の二氏を受け入れる

村田充八氏(大阪基督教短大常勤講師)

中谷博幸氏(大谷大学非常勤講師)

○秋期講演会(十一月十七日大阪ルーテル教会)

説教 高橋久之理事

講演 工藤弘雄理事

「十九世紀におけるイギリスの敬虔主義運動とその意義に

ついて」

講演 山口 昇氏(東部理事)

「黙示録の七つの教会」(スライド使用)

○新年講演会(一月一・二日、大阪基督教短大)

講師、カール・ヘンリー博士

これはキリスト者学生会と協力して行う。

編集後記

ここに本誌第十二号を皆様のお手もとにおとだけできますことを感謝しております。今回は論文四本を掲載することができました。これらの論文はいずれも新進気鋭の会員によるもので、編集作業を進めながらも、本会創設の時代を思うなら、一世代は若返った感をまぬがれ得ない思いがします。それだけ本会も成長して来たことは喜ばしいことですが、若手だけにまかせないで、老骨に鞭打ち負けて頑張らなければならぬと思うのは、「ごまめの歯ざしり」と言うものでしょうか。

余談はさておき、今回所収の本間論文は、ドイツのチュービンゲン大学に留学中の同氏から寄せられたものです。本文研究の論文はなかなかめずらしく、貴重なものと言えましょう。最初の原稿では、引用文にたくさんヘブル語の引用がなされていましたが、印刷の技術上の問題から、やむを得ず音写していただきました。何分にも距離的に遠く、連絡上時間がかかるため、英文のレジメなども間に合わず、編集者としても十分なことができませんでしたが、なるべく原稿のままの形をそこないように努力しました。

清水、内田両論文は、今年度の東部部会の研究発表において発表されたものですが、本誌のために論文の形にまとめている

だき、今回掲載することができ、感謝です。

五島論文は昨年掲載の予定でしたが同氏の事情により、今回掲載することができました。ただ所定の紙数を越えていたため、やむを得ず、大分カットしていただきました。そのため内容的に執筆者の最初の意図が十分に伝わらない面もあるやに見受けられ、編集者としても申しわけない気もしないわけではありませんが、大方のご了承を得たいと思います。

シンポジウム、および書評、ニュース、活動報告などに寄稿していただきました方々にも、ご協力を感じ、あつくお礼申し上げます。こうして無事に原稿が集まることは、編集者にとって何よりもうれしいことです。とにかく、原稿が集まらないことには、編集者は何もできませんので、編集者を泣かせぬよう、何卒よろしく願いました。締切期日と所定の枚数、その他の要項を守ってくださることが、編集者にとっては一番うれしいことです。

今回は他の編集の方々も外遊その他お忙しく、また小生も約五十日日本を留守にするなど、大詰めの段階でいろいろと多難であったために、行き届かぬ点が多々ありましたが、何卒おゆるしください。本会の発展を祈りつつ。

(山口 昇)

一九八一年十一月五日発行

定価 一七〇〇円

編集者 橋本龍三

山西 山口 昇 満

発行者

国立市谷保八四五三
東京基督教学園

東京基督教神学校内

日本福音主義神学会

印刷 いのちのことば社印刷部

発売 いのちのことば社